

このはしわたるべからず

このはしわたるべからず

(日本の昔話)

昔、一休さんという、とてもかしこい小僧こそうさんがいました。

ある日、一休さんは、とのさまのお屋敷やしきによられました。屋敷やしきの

前には川があり、橋の手前に、こんな立てふだが立っていました。

「このはし わたるべからず」

「はし」をわたってはいけない、ということです。とのさまは、一休さんがどうするか、楽しみにまっています。

ところが、一休さんは、平気な顔で橋のまん中を歩いてきました。

「立てふだが読めなかったのか。」

「いいえ。『はし』をわたるなど書いてありましたので、はしっこではなく、まん中を通ってまいりました。」

とのさまは、思わず大わらいしました。

1 橋の手前に立っていたのは、何ですか。



2 一休さんは、橋のどこを歩いてきましたか。

ア はしっこ

イ まん中

ウ 橋の下

3 一休さんが、橋をわたってもよいと考えたのは、どうしてですか。

--	--

4 とのさまが大わらいしたのは、どうしてでしょう。

ア 一休さんが、川に落ちたから。

イ 一休さんの、とんちがおもしろかったから。

ウ 一休さんが、立てふだを読めなかったから。